

「女性を惹きつける都市ふくおか」から、「日本でいちばん女性が活躍する都市ふくおか」へ。

—— 福岡県男女共同参画センターあすばる 館長 村山由香里氏



村山 由香里 (むらやま ゆかり)

九州大学文学部史学科卒業。

編集・広告営業などの会社勤務の経験を経て、1993年(株)アヴァンティを設立し代表取締役就任。編集長として働く女性を応援するネットワーク情報誌発刊。2010年4月より現職。

若者のメッカへと変容していく福岡の25年

25年前の福岡は、まるで都市に生命を吹き入れられたかのように、天神に隣接する地域が大変化を遂げていくときでした。

ユニークな店主が経営する居酒屋やバーがぽつぽつと点在していた、英数学館と水城学園という2つの予備校への道、親不孝通り(現・親富孝通り)境界が、またたくまに変容してゆきます。飲食店だけでなく、マリアクラブやベルサイユパレスなど一世を風靡したディスコが軒を並べ、若者たちが夜な夜な出歩く眠らない街へと変化していきます。大型ビルが建ち並び、風紀の悪い地区になりかけると、街の活気は道を隔てた天神西通りに移ります。

西通りにお店も人通りもまだ少ないころ、親不孝通りの活気を横目に、店主たちは、「西通りはおしゃれな通りと言われるけど、あんまり人が通らんよ」と、ぼやいていました。大名の路地裏にあるお店の店長さんと、「わかりにくいけん、通りに名前がつけられんかなあ」と話したのは23年ほど前のこと。そんなじりじりした数年を経て、若者のメッカは、親不孝通りから西通り、そして、路地裏の大名地区へと、

変化していきます。発祥は、大資本や行政の力ではなく、民の力。小さな個性なお店が1軒また1軒と集まってきたことです。そんな街に惹かれて、デザイナーやクリエイターたちが事務所を構えるようになり、彼ら彼女らが闊歩する街は、独特の空気を持つようになってきます。デザイン系ウェブ系クリエイターたちの波のあとは、ヘアアーティストたちが割拠し、日本でいちばんヘアサロン密度が高い街とさえ言われるようになります。

24、5年前、仕事で親不孝通りから西通り、大名境界を徘徊していると、地図を持った若者に、一晚に何回、道を尋ねられたことか。長崎からJRの「かもめ」に乗って週末に遊びに来る若者たちは「かもめ族」とネーミングされ、福岡は、九州じゅうから若者を集める都市に急速に成長していきました。「天神で仕事する」ことが、九州各地の女性の憧れになってきたのもこのころです。

フリーペーパーが街に与える影響

私が、働く女性向けのミニコミ誌の編集部に席を置いたのは、1985年12月。街の変化、う

ごめきとともに、営業して取材して写真を撮って記事を書き、広告を記事のように読ませる、いわゆる「フリーペーパー」を作ってきました。

「フリーペーパー」「フリーマガジン」という言葉が誕生する15年近く前のことです。

広告出稿が増えるとともに、同じジャンルのお店は同じページに集め、キャッチコピーやデータの書体やデザインを統一して、情報記事に見えるように工夫しました。「お金を出すんだから、色をつけたり、太字にしたり、目立つようにしたい」という広告主に「ダメです！パターンをあわせたほうが広告効果はあがります」と説得して、年末には何十ページだてもグルメページができるようになっていきます。「情報はたくさん集まれば、広告効果も高い」という法則は、仕事しながらの大きな発見でした。なんとか効果をあげようと、店主の顔写真を載せたり、店主の生きざまを記事仕立てにしたり、料理やヘアカットなどの作品をプロのカメラマンにお願いしてカッコ良く載せたり、あの手この手を考えてきたことは、福岡人の「出たがり」文化にマッチしたのかもしれない。

広告効果による街の変化も大きかったと思われま。それまで顧客の大半がサラリーマンだった飲食店に女性客が大挙して押し寄せ、店の雰囲気ガラリと変わったり、出店したばかりの店があつという間に立ち上がり、利益があがるようになったり。新しいショップ、珍しい商品を見て、心に響けば、女性たちは、読んだら即動き、購買行動につながっていきました。

「福岡は広告効果の高い媒体があるから出店しやすい」と、広告主からよく言われました。タケノコのように出現するさまざまな店の経営に、また、「元気な福岡」形成に、女性向けのフリーペーパーがどれだけ貢献したか、案外知られていないのではないのでしょうか。その後、インターネットの広がりと呼応するかのよう、全国にいくつものフリーペーパーが生まれ、

福岡は全国有数のフリーペーパー激戦区となりました。

男女雇用機会均等法から25年。男女の格差は、縮まったのでしょうか。

さて、25年前は、男女雇用機会均等法が施行された年でもあります。雇用の分野での男女平等に、法律が整備される第一歩が始まったときです。ファッションも、肩パットがどっかに入ったマスキュリンなスタイルが流行し、キャリアウーマン気取りでコツコツとヒールの音を響かせながら天神を歩いていたのを思い出します。

働く女性は自分のお金でおいしいものを食べ、海外旅行へ行き、お稽古ごとをして、楽しむことを覚えました。経済的に自立した女性たちは、「自分の可能性」を追求して、資格取得のための勉強や、海外留学など、「行動」を始めます。結婚退職する女性は圧倒的に多かったものの、「自分に投資」する女性たちが確実に増えていきました。「自分磨き」「自分探し」という言葉が女性の間で流行りはじめたのもこのころです。会社では、総務経理や庶務、営業事務など、男性の補佐的仕事をしていても、「違う自分」「本当の自分」を求めているように思えます。均等法はできても、企業はそう簡単に変わず、会社にいる自分の将来が見えづらかったのです。一般職と総合職に分け、多くの男性のなかに数名の総合職女性を採用し、育てきらずに辞めていく女性を「やっぱりオンナはダメだ」と男性管理職たちは決めつけていたのではないのでしょうか。一般職から総合職に転換するやる気のある女性も出てきますが、均等法から25年たって、いまだに日本の民間企業の課長以上の管理職が6%という現状を見れば、本気で企業が女性を育てようとしてきたとは思えません。

世界経済フォーラムというスイスの機関が

男女格差を測る指数を出し、世界ランクを発表しています。日本は、134カ国中94位。分野別に見ると、健康分野では1位ですが、教育分野で84位、経済、政治の分野では101位です。日本は、先進国とは思えない女性の地位が低い国なのです。国は、2020年までに指導的立場の女性を30%にするという目標をたてています。多様な人材を活かして競争力をつけようと、女性登用に積極的な企業がようやく目につくようになってきました。

「女性を惹きつける都市福岡」を戦略的に利用

福岡市は、20代後半から30代の男女比で女性の人口が3万人多いという、女子余りの都市です。それには理由があります。福岡には大学が多く、男子学生の多くは東京本社の会社へ就職で転出し、九州各地からやってきた女子学生の多くが福岡で就職し、残ります。サービス業が多く、女性が働きやすい都市、女性のおしゃれ心を満足させ、文化的で住みたい都市だからでしょう。

「女性を惹きつける都市」、これは、福岡の大きな特長です。

エステサロン、人材教育、料理研究家、インテリア、ブライダル、子育て関連、化粧品メーカー、通信販売、ライター、デザイナー、通訳、などなど。独立起業する人たちも多く、女性が元気な街です。若いうちに独立したいと、30歳前後で起業する女性も増えてきました。小さく始めるのに、市場としてちょうどいいサイズであること、街がコンパクトで職住近接ができること、また、女性にとっては企業のなかで自分の将来が見通せないという理由もあると思われれます。

日本政策投資銀行の調べによると、福岡市は、20代後半から30代前半の女性の未婚率が、政令指定都市でいちばん高い都市だそうです。こ

の25年を見てみると、女性の未婚率は、20代後半は30%から68%へ、30代前半は10%から41%へと変化しています。「いつかは結婚したい」と思いながら女性たちは、元気に働きながら独身のまま、30代、40代、50代に突入しています。

福岡は、山笠や九州男児など、男性的なイメージの強い都市ですが、「女性を惹きつける都市」を戦略として磨いていったほうがいいのではないのでしょうか。お店や商品も、女性に流行ると男性へ波及するのはマーケティングの定説です。「女性を惹きつける都市」のイメージをもっと打ち出し強化することで、優秀な男性が東京へ出ていかずに福岡に住みたい、福岡に戻ってきたい、と思わせる仕掛けができないのでしょうか。

眠れる女性の潜在能力を活かす都市へ

「結婚したい」のに「結婚できない」現象には、男女共同参画の問題が大きく絡んでいます。男性も女性も固定的役割分担意識から解放されなれています。男性は、「家庭を守らなければ」と、経済力が上がるまで結婚を先延ばしにし、女性は、「独身のうちに自分を確立して」より高い自分に似合う男性と結婚したいと結婚を先延ばしにします。

経済停滞が続く日本、男性さえも新卒で正社員として就職しにくい日本、いつリストラされるかわからない日本で、旧来のような、「夫が外で稼ぎ、妻は専業主婦」というモデルは、一握りの人たちの夢の生活と化しています。夫も妻も仕事をし、リスク分散をすることが必要です。

そのとき、「家事や子育て、介護は女性がするもの」という意識のままだと、「仕事+家事、育児、介護」と、女性だけに負担がかかってしまいます。「男性の家事参画」は、最近の若い女性の結婚相手に求める重要条件の一つです。

古い考えのままでは、未婚化晩婚化少子化高齢化へまっしぐらです。

結婚して第一子出産で仕事を辞める女性がいまだに7割近くいらっしゃいます。「子育ては女性の仕事」と思い込んでいるからです。学歴も高く、独身時代はバリバリ仕事をしていた女性が専業主婦をして、何年も家のなかで子どもとだけ向き合っています。能力がもったいないですし、子どもにとってもいいとは思えません。一度、職場を離れると再就職が難しい現状を変えることはできないのでしょうか。スキルを身につけるために、再就職を目指す女性のためにビジネススクールと組んで成功している米国の例を聞きました。福岡市には、大学がいくつもあるのですから、優秀な女性を社会で活かすための取り組みをどこかでできないでしょうか。眠れる女性の潜在能力を開発できれば、女性人口の多い福岡は全国でいちばん有利な都市になれる。

「女性を惹きつける都市」から一步すすめて、「女性が日本でいちばん生き生きと活躍する都市」を目指していただきたい。元気で優秀な女性が多いのですから、政治の分野でも経済の分野でも、決定権のある立場にいる女性が30%と言わず50%になってもいいのではないのでしょうか。

そのためには、社会の風土を変えることです。とくに、男性の意識の変換がこれからの福岡を決めると言っても過言ではありません。男性が、「文化を楽しむ」「家事や子育てを楽しむ」「女性が活躍することを応援する」ようになることが肝要です。

政策として、ぜひお願いしたいのは、女性の管理職比率、取締役比率の目標値をたてる。男性の家事育児が普通のことになっていくために、まずは行政から、男性の育児休業取得率100%を目指す。男女共同参画の指標を細かく決め、入札の点数を大幅加算する。家事や育児

を社会化するために、保育園の整備だけでなく、高齢者が生き甲斐として子どもと触れ、面倒をみるような仕組みを作る。家事サービスをもう少し安い金額で頼めるような仕組みを作る。起業する人を増やすために、中小企業支援を厚くする。ゆっくりゆっくりなんて考えていたら、坂道を転がるように少子化がすすみます。元気な女性たちは、福岡の最大の資源だと認識していただきたいと思います。

それから、最後に、25年後の福岡は、歴史を感じる都市になってほしいなと思います。グローバル化がすすみ、アジアの人たちがあふれる街になっているでしょう。博多は、古代から交易が盛んなところ。中世の博多は、半僧半商の中国人たちがたくさん住む国際都市でした。街の人たちが、普通に歴史を語り、文化人が集い、ネットからリアルへのさまざまなコミュニティが街の活気を作る都市、新しい芸術や文化の香りがする都市になってほしい。「えっ、昔は、世の中は男性だけが動かしてたの？信じられない」という声が時空を越えて聞こえてくるようです。

インタビュー日:2011/8/9